

子どもの歌のピアノ伴奏における運指技術の検討

—右手旋律部分の分析をとおして—

松井 萌

本論は、子どもの歌を鍵盤楽器で演奏する際に必要な表現力の一つである、レガート奏法の達成を目指した運指技術を明らかにすることを目的とする。本学で子どもの歌のテキストとして使用している「歌のカレンダー」¹⁾の右手旋律部分における運指技術の種類を分類し、その出現回数を調査し、子どもの歌のピアノ伴奏に必要な運指技術を探った。その結果、必要な運指技術の優先順位が明らかになり、これらを習得するためのトレーニング方法を検討した。

キーワード：子どもの歌、ピアノ、運指

1. はじめに

子どもの歌を鍵盤楽器で演奏する際の運指技術に関する先行研究は、岩口・三宅 (1998)、三好 (2009)、笹森 (2015)、飯泉 (2016) の研究が挙げられる。岩口・三宅 (1998) は、バイエルと「こどものうた 200」²⁾の旋律の構造とそれに伴う指の動きについて分析・比較し、幼児歌曲の右手旋律の運指技術の習得には、バイエルにない「第1指—第2指間以外の隣接する指間における指広げ」「指広げ(指ちぢめ)が連続する運指パターン」「指広げと指ちぢめが連続する運指パターン」「指広げ(指ちぢめも含む)と同音連打が連続する運指パターン」「指広げ(指ちぢめ)と指くぐり・指まわしが連続する運指パターン」「3度離れた指くぐり・指まわし」の運指練習を、幼児歌曲において頻出度の高いへ長調やハ長調、ニ長調、ト長調を中心とした調性において補う必要があると述べている³⁾。三好 (2009) は、旋律構造がヨナ抜き音階に基づいて作られた子どもの歌の演奏に対して、「ミソラド = 1235」ポジションの使用を提案し、その有効性を述べている⁴⁾。笹森 (2015) は、「こどもの

うた 200」の楽曲を中心に 50 曲の右手旋律部分のポジション構成の分析と初心者向けの運指を考察し、ポジションを意識することの有効性を述べている⁵⁾。飯泉 (2016) は、杉浦の「著名練習曲における練習項目の技法別分類整理一覧」⁶⁾を飯泉が解釈し整理した分類をもとに、「こどものうた 200」の楽曲を中心に 53 曲の演奏技術を分類し、出現回数の整理と上位二位までに出現した演奏技法の百分率を示している。その結果、右手の技法の最多出現は「同音反復連打奏法及び類似の奏法」、左手の技法の最多出現は「三和音の重音(和音)奏法」であると述べている⁷⁾。

本研究は、子どもの歌のピアノ伴奏において、右手で旋律楽譜(高音部譜表)をレガート奏法で演奏するための運指に関する演奏技術の検討を目的とする。筆者は、A 短期大学で、「子どものための音楽 I (歌とピアノ)」「(1 年次前期開講科目)」、「子どものための音楽 II (歌と弾き歌い)」「(1 年次後期開講科目)の、ピアノ個別指導を担当している。これらの科目のピアノ演奏技術に関する到達目標は、「保育実践で扱うピアノ曲や子どもの歌を表現力豊かに演奏できる。」であ

る。筆者は、学生が子どもの歌の伴奏を表現力豊かに演奏するには、レガート奏法に関する以下の課題があるのではないかと考えた。①「旋律をなめらかに演奏できる運指を選択できない」、②「旋律をなめらかに演奏できる運指を選択してもなめらかに弾くことができない」、③「同じ箇所で弾き直す」、④「教則本の楽曲と比較して、子どもの歌の演奏を難解に感じる」である。これらの課題を改善するために、運指に関する演奏技術に着目し、検討を行った。

本研究では、授業で使用している子どもの歌のテキスト「歌のカレンダー」⁸⁾の楽曲の右手旋律部分を取り上げ、先行研究で示された運指技術の出現回数の調査を実施した。さらに、先行研究では見当たらなかった「拡張・収縮した指間を、基本ポジションに戻す運指技術」(本稿では「指戻し」とする)の出現回数の調査を実施した。これらを踏まえた上で、子どもの歌のピアノ伴奏において、レガート奏法で演奏するためにはどのような運指に関する演奏技術が必要か考察する。

2. 調査方法

「歌のカレンダー」の楽曲110曲のうち、楽譜に指番号(指を数字で示し、親指は1、人差し指は2、中指は3、薬指は4、小指は5)の指示があるのは4曲のみである。調査の準備として、全楽曲の右手で演奏する旋律に以下の5つの条件を考慮して運指を設定し、指番号を付与した。

2-1 運指設定の5つの条件

- 1) 歌詞やフレーズに従い、旋律をレガート奏法で演奏できる。
- 2) 鍵盤上に手を設置した際、1指と5指の音程が5度、2指、3指、4指は鍵盤に1対1対応となる形を基本ポジションとする。

- 3) フレーズを演奏する間は、極力1つのポジションに指を固定する。
- 4) 同一または類似音型は、なるべく同じ運指を使用する。
- 5) 各指の特徴に沿っている。

ピアノ演奏に関する指の使い方について確認する。人類の手は、母指対向性(「母指が他の4本の指と向いあい、結果としてもものを握ることができること」⁹⁾[山田・前川・江上・八杉・小関・古谷・日高編 1983])がある。2指、3指、4指及び5指は、垂直方向に打鍵するが、1指は垂直方向に打鍵することに加えて、手のひらの内側方向に出し入れをし、打鍵することができる。そのため、「指くぐりにおいて、くぐらせる指は1指に限定する」及び「指またぎは1指をまたぐ形に限定する」こととする。2指、3指及び4指は、1指及び5指と比較して長い。ピアノの黒鍵は、白鍵と比較して高く奥の位置にあることから、「黒鍵は、なるべく2指、3指または4指で打鍵する」こととする。

2-2 演奏技術の分類

運指に関する演奏技術は、以下の14項目に分類する。

- A) 指広げ
- B) 指縮め
- C) 指戻し
- D) 指またぎ
- E) 指くぐり
- F) 1指が同音に保持された指またぎ
- G) ポジション移動のための指かえ
- H) 同音連打のための指かえ
- I) 同指による同音連打
- J) 置き換え

- K) 重音・和音
- L) 重音・和音メロディ
- M) 重音・和音連打
- N) 多声

- ⑦ 3指と5指
- ⑧ 1指と4指
- ⑨ 2指と5指
- ⑩ 1指と5指

付与した指番号を用いた楽曲の演奏の際における、上記の各演奏技術の出現回数及び出現曲数を調査した。その結果を踏まえ、子どもの歌のピアノ伴奏に必要な運指に関する演奏技術を検討した。なお、重音・和音及び多声は、必要に応じて単旋律等に編曲して演奏する可能性が考えられるため、本稿では、A から I の 9 項目を取り上げる。

2-3 表記方法

本稿での表記方法を示す。指の組み合わせの表記は、以下の①から⑩の番号で表記する。

- ① 1指と2指
- ② 2指と3指
- ③ 3指と4指
- ④ 4指と5指
- ⑤ 1指と3指
- ⑥ 2指と4指

各指の間の音程は度数のみを示し、長・短・増・減等は考慮しない。半音は、臨時記号の使用により発生する場合のみを調査対象とし、「半」と表記する。

3. 調査結果

3-1 各演奏技術の出現回数結果

各演奏技術の出現回数及び出現曲数を図1及び図2に示す。「I 同指による同音連打」が最多となった。

各演奏技術の結果の詳細を以下に示し、指の組み合わせ、各指間の音程を図3から図6に示す。また、各演奏技術の例を譜例1から譜例4に示す。

A) 指広げ

「指広げ」は、指間を基本ポジションより広げる技術である。譜例1に示す四角の部分、指の組み合わせ①を用いた3度の「指広げ」（本稿では「①-3」と表記）の例である。

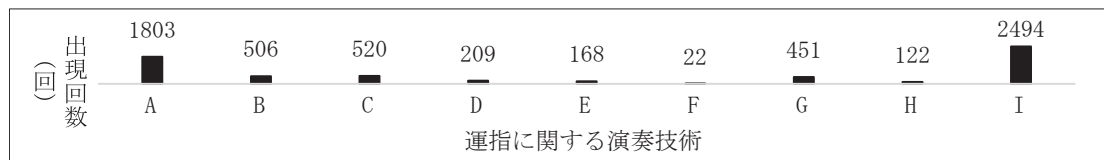


図1 「運指に関する演奏技術」出現回数

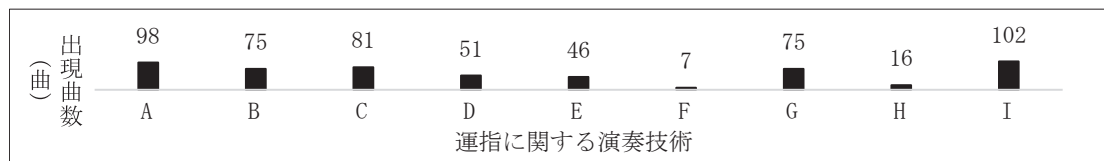


図2 「運指に関する演奏技術」出現曲数



指番号： 1 2 3 4

譜例1 「指広げ」(①-3)の例

「指広げ」の指の組み合わせ-度数別の出現回数結果を図3に示す。指広げは、①から⑩までの全ての指の組み合わせにおいて、基本ポジションより鍵盤1つ分の間を開けた奏法(①から④は3度、⑤から⑦は4度、⑧及び⑨は5度、⑩は6度)が最も多いことが明らかになった。鍵盤3つ分の間を開けた指広げは、1指を含む指の組み合わせ(①、⑤、⑧、⑩)のみに出現した(「鍵盤3つ分の間を開けた指広げ」は、以下の指広げ、「①-5」、「⑤-6」、「⑧-7」、「⑩-8」を指す)。全ての指の使用回数を比較すると、1指を使用する回数が最多(1284回)だった。

B) 指縮め

「指縮め」は、指間を基本ポジションより狭める技術である。譜例2に示す四角の部分、指の組み合わせ⑤を用いた2度の「指縮め」(本稿では「⑤-2」と表記)の例である。

「指縮め」の指の組み合わせ-度数別の出現回

数結果を図4に示す。指縮めは、①から⑤の指の組み合わせでは半音まで、⑥から⑩の指の組み合わせでは2度までであった。



指番号： 1 3 4 5

譜例2 「指縮め」(⑤-2)の例

C) 指戻し

「指戻し」は、「指広げ」・「指縮め」によって拡張・収縮した指間を基本ポジションに戻す技術である。譜例3に示す四角の部分は、「指戻し」の例である。指の組み合わせ①を用いた3度の「指広げ」によって拡張した指間を、指の組み合わせ⑤を用いて「指戻し」をしている。



指番号： 2 1 3 2

譜例3 「指戻し」(⑤)の例

「指戻し」の指の組み合わせ別の出現回数結果

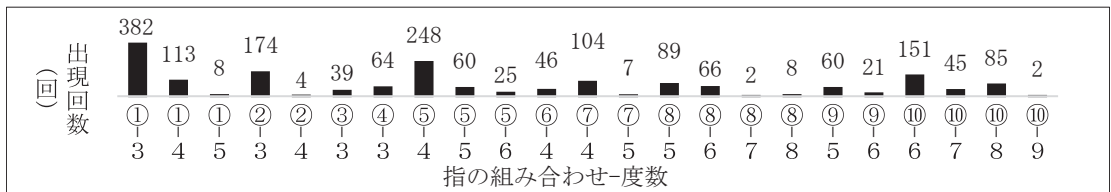


図3 「指広げ」 出現回数(指の組み合わせ-度数別)

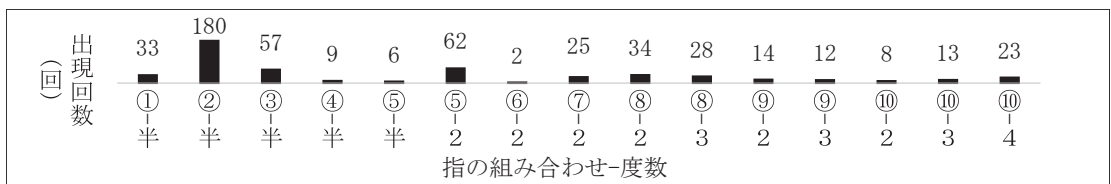


図4 「指縮め」 出現回数(指の組み合わせ-度数別)

を図5に示す。指戻しは、指の組み合わせ①を用いた指戻しが最多だった。

D) 指またぎ

「指またぎ」は、2指、3指または4指が1指をまたぐ技術である。

1指をまたぐ指別では、2指(94回・30曲)・3指(98回・27曲) > 4指(17回・9曲)だった。2度下が最も多く(186回・47曲)、次に3度下(23回・7曲)があった。

E) 指くぐり

「指くぐり」は、2指、3指または4指の下を1指がくぐる技術である。

1指がくぐる指別では、2指(93回・25曲)・3指(69回・26曲) > 4指(6回・4曲)だった。2度上が最も多く(152回・41曲)、次に3度上(16回・7曲)があった。

F) 1指が同音に保持された指またぎ

「1指が同音に保持された指またぎ」は、指またぎの後、1指を2指の左に戻さずに、同音鍵盤上に保持して行う指またぎの技術である。

使用する指を調査した結果、1指をまたぐ指は全て2指だった。2度下が最も多く(15回・7曲)、次に3度下(7回・3曲)があった。

G) ポジション移動のための指かえ

「ポジション移動のための指かえ」は、同音反復において、ポジションを移動するために指をかえる技術である。譜例4に示す四角の部分、指の組み合わせ⑤を用いた「ポジション移動のための指かえ」の例である。



指番号：3 1 3 2

譜例4 「ポジション移動のための指かえ」
(⑤)の例

「ポジション移動のための指かえ」の指の組み合わせ別の出現回数結果を図6に示す。ポジション移動のための指かえは、指の組み合わせ⑤を用いた指かえが最多だった。全ての指の使用回数を比較すると、3指の使用回数が最多(249回)だった。

H) 同音連打のための指かえ

「同音連打のための指かえ」は、同音連打において、音楽的に弾くために指をかえる技術である。

用いる指を調査した結果、「2本の指を交互に打鍵(39回・9曲)」、「3本の指を順番に打鍵(76

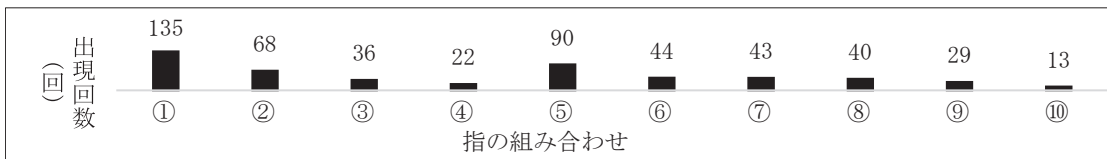


図5 「指戻し」 出現回数 (指の組み合わせ別)

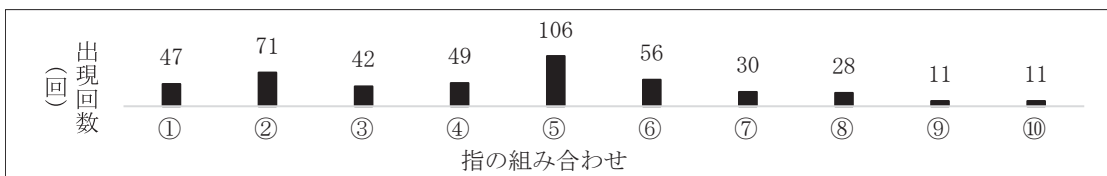


図6 「ポジション移動のための指かえ」 出現回数 (指の組み合わせ別)

回・7曲)、「4本の指を順番に打鍵(7回・2曲)」の3項目に分類できた。

1) 同指による同音連打

「同指による同音連打」は、同音反復において、同じ指を用いて連打する技術である。

打鍵する指別では、3指(699回・85曲) > 2指(529回・78曲)・1指(519回・77曲) > 4指(388回・71曲)・5指(359回・72曲)となった。

3-2 指間の幅が伸縮する運指の連続

基本ポジションより指間が伸縮する運指が、連続して使用される形があった(808回・82曲)。連続することによって形成される音型のうち、和音の分散として捉えることができる音型があった(210回・40曲)。和音の種類は、「3和音(基本形が3度間の3音で構成される和音)」の基本形・第1転回形・第2転回形、「7の和音(基本形が3度間の4音で構成される和音)」の基本形・第1転回形・第2転回形(第3音省略)、「オクターブを含む和音(3和音にバス音の1オクターブ上の音を加えた和音)」の基本形・第1転回形・第2転回形の9種類に分類できた。7曲以上にあった形は、次の3つの形、1)「7の和音の基本形(根音に1指、第3音に2指、第5音に3指、第7音に5指を使用)」(34回・7曲)、2)「オクターブを含む和音の基本形(根音に1指、第3音に2指、第5音に3指、バス音の1オクターブ上の音に5指を使用)」(24回・7曲)、3)「オクターブを含む和音の第2転回形(第5音に1指、根音に2指、第3音に3指、バス音の1オクターブ上の音に5指を使用)」(20回・8曲)だった。1)から3)の例を譜例5から譜例7に示す。



指番号: 1 2 3 5
譜例5 1)「7の和音の基本形」



指番号: 1 2 3 5
譜例6 2)「オクターブを含む和音の基本形」



指番号: 1 2 3 5
譜例7 3)「オクターブを含む和音の第2転回形」

4. 考察と今後の課題

本調査の結果、子どもの歌の右手で演奏する旋律をレガート奏法で演奏するために必要とされる、運指に関する演奏技術が明らかになった。「F) 1指が同音に保持された指またぎ」及び「H) 同音連打のための指かえ」は、必要な演奏技術ではあるが、全楽曲の20曲以下であり、優先順位が低い。子どもの歌の伴奏において、全楽曲の40曲以上に見られた次の7つの技術、「A) 指広げ」、「B) 指縮め」、「C) 指戻し」、「D) 指またぎ」、「E) 指くぐり」、「G) ポジション移動のための指かえ」、「I) 同指による同音連打」の習得が必要であることが明らかになった。

これらの「優先して習得する技術」について、学生の習得のしやすさを考慮して、7つの技術を4つに分類した。「A) 指広げ」、「B) 指縮め」、「C) 指戻し」は、指の間を伸ばしたり縮めたりしながら演奏する技術であるため、1つの項目にまとめる。「D) 指またぎ」、「E) 指くぐり」は、必ず1指を使用する技術であるため、1つの項目

にまとめる。「G) ポジション移動のための指かえ」と「I) 同指による同音連打」はそれぞれ1つの項目とする。よって、7つの技術を4つの項目に分類した。各項目を考察し、その上で、これらの運指技術の習得を目的とした運指トレーニングを提案する。

4-1 優先して習得する技術

1) 指広げ・指縮め・指戻しに関する運指技術 (A、B、C)

「指広げ」及び「指戻し」を中心に、指間を伸縮させながら演奏する技術が必要であることが分かった。指間の伸縮には、「楽譜上の2音間の音程と鍵盤・指間の幅の一致」と「指間の伸縮に適した手の向きと手首の使い方」の習得が必要である。さらに、3-2に挙げた、「和音の分散として捉えることができる音型」の運指の習得は、これらの音型での運指選択の助けとなると考える。

2) 指またぎ・指くぐりに関する運指技術 (D、E)

「1指と2指間」及び「1指と3指間」が中心であり、指またぎ・指くぐりの89.7%は、2度間に出現することが分かった。なめらかに指またぎ・指くぐりを行うには、「各指と1指をなめらかに演奏する技術」と「手首の平行移動」の習得が必要である。

3) ポジション移動のための指かえ (G)

2度及び3度の移動を中心に、指かえをすることでポジションを移動する技術が必要であることが分かった。「指広げ」・「指縮め」・「指またぎ」・「指くぐり」に代わる選択肢となる運指技術であり、円滑に演奏するためには、指かえの技術の習得が必要である。

4) 同指による同音連打 (I)

全ての指において、70曲以上に出現すること

が分かった。正確なテンポを保ち、レガート奏法を意識した同音連打の演奏技術の習得が必要である。

4-2 基本ポジションの鍵盤認知の感覚

本調査の運指設定は、基本ポジションを基に考案したことから、各調の音階と基本ポジションの鍵盤認知の感覚が重要である。調査対象の楽曲の調は、ハ長調 (36曲) が最多で、ヘ長調 (27曲)、ニ長調 (20曲)、ト長調 (14曲)、変ホ長調 (7曲)、変ロ長調 (3曲)、イ長調 (1曲)、ホ短調 (1曲)、ハ短調 (1曲) であった。10曲以上に使用される調 (ハ長調・ト長調・ニ長調・ヘ長調) を中心に、各調の音階の把握が必要であると考えられる。

4-3 運指トレーニング

「優先して習得する技術」及び「基本ポジションの鍵盤認知の感覚」の習得を目的としたトレーニングについて、先行研究の事例を挙げながら提案する。運指技術の習得には、読譜から得られる「視覚的な情報」、鍵盤を打鍵することで得られる「身体の感覚的な情報」、音の連結を聴くことで得られる「聴覚的な情報」を総合したトレーニングが必要であると考え、楽譜を使用し鍵盤楽器の演奏をとおした課題が適切である。また、1つの技術に特化し、難易度はバイエル教則本の60番台程度であることを前提とする。

1) 指広げ・指縮め・指戻しに関する運指技術

本調査の結果を踏まえ、各指の組み合わせに必要な指間の伸縮の範囲について、表1に表記する。「指広げ」については、1指を含まない指の組み合わせについては、基本ポジションより鍵盤1つ分の間を開けた奏法 (②から④は3度、⑥及び⑦は4度、⑨は5度) の習得が必要である。

1 指を含む指の組み合わせである①、⑤、⑧及び⑩については、より広くまで指間を開く指広げの奏法の習得が必要であり、①は3度及び4度、⑤は4度及び5度、⑧は5度及び6度、⑩は6度、7度及び8度の音程に指広げをする奏法の習得が必要である。「指縮め」について、①から③は半音、⑤は2度、⑧は3度及び2度の音程に指縮めをする奏法の習得が必要である。「指戻し」について、①から③及び⑤から⑨の指の組み合わせを用いて正確に基本ポジションに戻す奏法の習得が必要である。加えて、基本ポジションの鍵盤認知の感覚は、全ての指の組み合わせにおいて重要である。

表1 指間伸縮の範囲 (指の組み合わせ別)

指の組み合わせ (使用指)	基本ポジションの音程	指間伸縮の範囲
① (1指と2指)	2度	半音～4度
② (2指と3指)	2度	半音～3度
③ (3指と4指)	2度	半音～3度
④ (4指と5指)	2度	2度～3度
⑤ (1指と3指)	3度	2度～5度
⑥ (2指と4指)	3度	3度～4度
⑦ (3指と5指)	3度	3度～4度
⑧ (1指と4指)	4度	2度～6度
⑨ (2指と5指)	4度	4度～5度
⑩ (1指と5指)	5度	5度～8度

次に、上記の指広げ・指縮め・指戻しに関する運指技術を習得するためのトレーニングの検討を試みる。木許・武田・長井 (2022) は、著書の「より機能的な運指」の章において、「指のポジションを移動しながら演奏する技術を身につけるための基本的な運指」を学ぶためのトレーニング課題を運指技術別に収めている¹⁰⁾。木許・武田・長井の著書に示される「3度の音程をとる練習 (4) 1-2・2-1の指を使って」及び「2本の指を広げる練習」は指広げに関する課題、「2

本の指を寄せる練習」は指縮めに関する課題、「3度の音程をとる練習 (5) 総合的な練習」は指広げと指戻しを含む課題であると考えられる。これらの課題で対象の「指の組み合わせと音程」は、指広げに関しては8パターン (1-2指で3度、1-3指で4度、1-4指で5度、1-5指で6度、5-4指で3度、5-3指で4度、5-2指で5度、1-5指で8度)、指縮めに関しては3パターン (3-1指で2度、4-1指で3度、5-1指で4度)、指戻しに関しては1パターン (1-2指で3度の指広げの後2-1指で戻す) である。樹原 (1993) は、著書の教材に、「ポジションいどう②ひろげる」として、指広げのトレーニング課題を収めている¹¹⁾。樹原の示す課題のうち、「ゆるやかなのぼりざか」及び「ゆるやかなくだりざか」は、指広げと指戻しに関する課題であると考えられる。これらの課題で対象の「指の組み合わせと音程」は、7パターン (1-3指で4度の指広げの後2-1指で戻す、2-4指で4度の指広げの後3-2指で戻す、3-5指で4度の指広げの後4-3指で戻す、5-4指で3度の指広げの後4-5指で戻す、4-3指で3度の指広げの後3-4指で戻す、3-2指で3度の指広げの後2-3指で戻す、2-1指で2度の指広げの後1-2指で戻す) である。

以上の先行研究のトレーニング課題調査から、必要な指広げ・指縮め・指戻しに関する運指技術は、先行研究に収められている課題を練習する、及び表1に示す指間伸縮の範囲に課題を応用して練習することで習得できると考える。練習する際、指間の伸縮に適した手の向きと手首の使い方を指導し、的確な鍵盤位置に指を準備するように導くことが重要である。

次に、「和音の分散として捉えることができる音型」の運指を習得するためのトレーニングを提案する。習得が必要な和音は、和音進行の基本となる「主要三和音の連結 (I - IV - V - I)」及び3-2に挙げた3つの形、「7の和音の基本形」、

「オクターブを含む和音の基本形」、「オクターブを含む和音の第2転回形」であると考え。「ハ長調の主要三和音の連結」の分散和音の課題案(譜例8)及び「オクターブを含む和音の基本形」の分散和音の課題案(譜例9)を以下に示す。

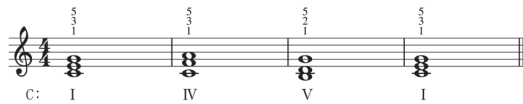
分散和音の奏法の習得には、手の位置及び形を和音で把握することが重要であり、分散和音の課題の前に、和音で弾く課題が必要であると考え。主要三和音の連結における主和音の形については、右手は旋律を担うことが多いため、譜例8に挙げた3つのパターン、「a) 主和音を基本形とする」形、「b) 主和音を第1転回形とする」形、「c) 主和音を第2転回形とする」形の習得が必要であると考え。習得が必要な調は、本調査の結果から、ハ長調・ト長調・ニ長調・ハ長調である。更なる検討が必要な事項として、左手のバス音の追加が挙げられる。本調査は、右手で演奏する旋律を対象としているた

め、譜例8の課題は右手のみとしている。しかし、これらの課題において、左手のバス音(ハ長調では、音はC-F-G-C、運指は5-2-1-5を使用)を加えることは、和声感を習得する上で有効であると考え、慎重に検討する必要がある。「7の和音の基本形」及び「オクターブを含む和音の第2転回形」の分散和音については、譜例9の課題を応用する。これらの運指は、本調査の結果から、譜例5から譜例7に示す運指が適切である。ただし、「7の和音の基本形」及び「オクターブを含む和音の第2転回形」の運指は、奏者の手の形によっては、3指で打鍵している箇所を4指で打鍵する方が有効である場合があるため、選択できるよう導く必要がある。

2) 指またぎ・指くぐりに関する運指技術

本調査の結果を踏まえ、「指またぎ」及び「指くぐり」は、2度間において、「1指と2指」及び「1指と3指」の間で行う奏法の習得が必要で

a) 主和音を基本形とする主要三和音の連結



a) -分散和音の形



b) 主和音を第1転回形とする主要三和音の連結



b) -分散和音の形



c) 主和音を第2転回形とする主要三和音の連結



c) -分散和音の形



譜例8 「ハ長調の主要三和音の連結」の分散和音の課題

オクターブを含む和音の基本形



分散和音の形



以上の練習を、開始の和音が1オクターブ上になるまで続ける
譜例9 「オクターブを含む和音の基本形」の分散和音の課題

あると考える。

次に、以上の指またぎ・指くぐりに関する運指技術を習得するためのトレーニングの検討を試みる。木許・武田・長井（2022）の著書に示される、「指をくぐったり、指をまたいだりする練習」¹²⁾は、「1指が同音に保持された指またぎ」及び「指またぎ・指くぐり」に関する課題であると考えられる。これらの課題で対象の指は、「1指が同音に保持された指またぎ」に関しては1パターン（2指・2度下）、「指またぎ・指くぐり」に関しては2パターン（3指・2度間、4指・2度間）である。

以上の先行研究のトレーニング課題調査から、必要な指またぎ・指くぐりに関する運指技術は、先行研究に収められている課題を練習する、及び「1指と2指の間で行う2度間の指またぎ・指くぐり」に課題を応用して練習することで習得できると考える。練習の際、手首の平行移動の方法を指導し、各指と1指をなめらかに連結できるよう導くことが重要である。

3) ポジション移動のための指かえ

本調査の結果を踏まえ、2度及び3度の移動をする指かえの奏法の習得が必要である。

次に、以上のポジション移動のための指かえを習得するためのトレーニングの検討を試みる。木許・武田・長井（2022）の著書に示される、「同じ音で指をかえる練習（1）」¹³⁾は、ポジション移動のための指かえ（3-2指で2度の移動をする・上行形）の課題であると考えられる。以上の先行研究のトレーニング課題調査から、2度の移動をする指かえの上行形のうち、②から④の指の組み合わせについては、先行研究の課題を練習する、及び課題を応用して練習することで習得できると考える。2度の移動をする指かえの下行形には、譜例10に示す課題を提案する。③及び④の指の組み合わせについては、譜例10の課題を応用する。①の指の組み合わせについては、先行研究の課題の応用が難しいため、譜例11に示す課題を提案する。3度の移動をする指かえには、譜例12に示す課題を提案する。⑥及び⑦の指の組み合わせについては、譜例12の課題を応用する。



譜例10 「2度の移動をする指かえ」の下行形の課題（②の指の組み合わせによる）



譜例11 「2度の移動をする指かえ」の課題（①の指の組み合わせによる）



譜例12 「3度の移動をする指かえ」の課題（⑤の指の組み合わせによる）

これらの指かえの目的は「ポジションを移動すること」であり、円滑に指をかえる技術の習得に加えて、同音反復の箇所において、鍵盤1つ分（2度）及び2つ分（3度）の距離を正確にポジション移動する感覚を身に付けるよう導くことが重要である。

4) 同指による同音連打

本調査の結果を踏まえ、すべての指において必要な奏法であると考え。同音反復の運指について、武内（2014）は「指を順番に変えていくのを原則とする」と述べており¹⁴⁾、同音反復において同じ指の連続使用は一般的ではない。一方で、仲嶺（2014）は「同音反復は、必ずしも指を変えなくて良い」と述べている¹⁵⁾。筆者は、楽曲をレガート奏法で演奏できるのであれば、同音反復において同じ指を連続して使うことは可能であると考え。

次に、同指による同音連打の奏法のトレーニングの検討を試みる。杉浦（1981）は、著書の「著名練習曲における練習項目の技法別分類整理一覧」の中で、「技巧の分類〔V〕＜手首の技巧 和音、オクターブを含む＞〔6〕同じ指で同じ音を連打する技巧」として、同指による同音連打の練習曲を、右手に関しては9曲挙げている¹⁶⁾。杉浦の挙げる練習曲のうち、難易度や使用指を考慮した結果、子どもの歌の伴奏に必要な同指による同音連打の奏法の習得には、「ツェルニー リトル・ピアニスト」¹⁷⁾の第3番が適切であると考え。ただし、第3番には「4指による同音連打」が出現しないため、追加の課題を検討する必要がある。追加する課題として、《小ぎつね》（勝承夫作詞、ドイツ民謡、伊藤嘉子編曲）¹⁸⁾の7小節目から14小節目を課題として取り上げて補うことを提案する。《小ぎつね》の7小節目及び11小節目には4指による同音連打、8小節目及び12小節目には3指による

同音連打、13小節目には2指による同音連打が出現する。

以上のことから、同指による同音連打の奏法のトレーニング課題として、前述の2曲を提案する。練習する際、レガート奏法を意識するよう導くことが重要である。

5) 基本ポジションの鍵盤認知の感覚

基本ポジションの鍵盤認知の感覚は、1) から4)の「優先して習得する技術」の基礎として重要であると考え。樹原（1992）は、「手が鍵盤の幅を正確に覚え、手を見ずに鍵盤をきちんととらえる感覚」を「鍵盤ポジション感覚」と呼び、ピアノ学習の基礎の目標のひとつに挙げている¹⁹⁾。上原（2016）は、ピアノ演奏においては、「鍵盤を見ずに情報処理ができる奏法を身につける必要がある」とし、ブラインドタッチの有効性を述べている²⁰⁾。上原は、「ブラインドタッチの基礎」として、鍵盤1本に対して指1本が配置できる基礎訓練を取り上げ、視線は楽譜に向けて自分の指を見ずに階名を歌いながら弾く練習方法を示している。

以上の先行研究のトレーニング課題調査から、基本ポジションの鍵盤認知の感覚は、上原の示す基礎訓練を練習する、及び4.2に挙げた調性（ハ長調・ト長調・ニ長調・ヘ長調）に応用して練習することで、より正確な感覚を習得できると考える。意識的に鍵盤認知の感覚を習得するよう導くことが重要である。

4-4 今後の課題

本調査によって明らかになった「優先して習得する技術」の多くは、先行研究に収められているトレーニング課題を練習する、及び応用して用いることで習得できることが分かった。しかし、これらの先行研究に示されたトレーニングの中から、本学の学生に必要な運指技術の抽

出ができたことは大きな成果だったと考える。

今後の課題として、今回の調査では、右手のみを対象としたため、両手で弾く際に生じる課題とトレーニング方法について検討が必要である。レガート奏法の習得には、音を単音で捉えるのではなく、隣り合う音の関係を意識及び理解し、読譜や演奏経験を積むことが必要である。引き続き、運指の観点から、レガート奏法を指導するために必要な演奏技術とトレーニング方法について探っていきたい。

付記

本研究は、日本保育学会第75回大会ポスター発表を新たな知見を基に加筆修正したものである。

引用文献

- 1) 伊藤嘉子・小川宜子・妹尾美智子・長柄孝彦・早川史郎(編)(1998) 保育の四季 歌のカレンダー. 株式会社エー・ティー・エヌ.
- 2) 小林美実(編)(1975) こどものうた 200. チャイルド本社.
- 3) 岩口摂子・三宅義和(1998) 保育科学生へのピアノ指導法の基礎研究(2) 一運指法を出発点とする指導の可能性②一. 日本保育学会大会研究論文集, 51, 170-171.
- 4) 三好優美子(2009) 子どもの歌のピアノ演奏時における「ミソラド= 1235」ポジションの有効性. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 44, 67-75.
- 5) 笹森誠(2015) ピアノ初心者のための運指法に関する考察. 青森明の星短期大学研究紀要, 41, 1-18.
- 6) 杉浦日出夫(1981) 練習曲の効果的使用法. 浅香淳・渡辺操・津上恭子・栗山和・橋本和子・谷保温子(編). 最新ピアノ講座 第5巻 ピアノ実技指導法. 音楽之友社. 44-138.
- 7) 飯泉祐美子(2016) 保育者養成課程における「ピアノ弾き歌い演奏技術」獲得のための試み一演奏技法の分類一. 帝京科学大学教職指導研究, 1, 75-81.
- 8) 前掲1)
- 9) 山田常雄・前川文夫・江上不二夫・八杉竜一・小関治男・古谷雅樹・日高敏隆(編)(1983) 岩波 生物学辞典 第3版. 岩波書店. 1215.
- 10) 木許隆・武田恵美・長井典子(編著)(2022) コードネームとりズムによる Basic and Variations: 小学校教諭・保育者をめざす. 圭文社. 16-20.
- 11) 樹原涼子(1993) ピアノランド たのしいテクニック④. 音楽之友社. 20-23.
- 12) 前掲10). 19.
- 13) 前掲10). 20.
- 14) 武内俊之(2014) ピアノ演奏における運指法についての基本概論. 福岡教育大学紀要, 63, 2.
- 15) 仲嶺まり子(2014) こどものうた弾き歌い指導における副教材の活用について一「指使いサブノート」導入の試みを通して一. 別府大学短期大学部紀要, 33, 135.
- 16) 前掲6). 112.
- 17) Czerny, C. (c1959) ツェルニー リトル・ピアニスト(全音楽譜出版社出版部編). 全音楽譜出版社. (Czerny, C. *The little pianist Op.823*.)
- 18) 前掲1). 69.
- 19) 樹原涼子(1992) ピアノランド たのしいテクニック⑤. 音楽之友社. 4.
- 20) 上原由記音(2016) ブラインド・タッチ利用によるピアノコードネーム奏法. 琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要, 23, 39-42.